

# 深圳中国民俗文化村における「少数民族」の表象

李 小 妹

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科  
『人間文化創成科学論叢』第15巻（2012年）  
2013年3月発行 抜刷

## 深圳中国民俗文化村における「少数民族」の表象

李 小 妹\*

### Representation of Minority Nationality in Chinese Folk Culture Village of Shenzhen

LI May

#### Abstract

Since being founded in 1979, Shenzhen Municipality has been playing the role as one of the most successful platforms for attracting foreign investment as well as a showplace of China's socioeconomic transformation. However, when the first theme park of China named Splendid China opened in Shenzhen in 1989, and then two years later the sister park "Chinese Folk Culture Village" opened in 1991, another role of Shenzhen revealed itself, which is to show Chinese nation and its nationality to the global world that China has been increasingly incorporated into since the early 1980s. This paper examines the ways and strategies of the representation of nation and minority nationality in Chinese Folk Culture Village and assumes that added to the National territory represented in Splendid China, Chinese Folk Culture Village makes it possible for the majority Han Chinese tourists to (re)construct a Chinese national identity by constructing and consuming the difference between themselves and ethnic minority nationalities.

Key words: nation, representation, Shenzhen Municipality, Chinese Folk Culture Village, minority nationality

#### 1. 研究の目的と方法

##### 1.1 はじめに

改革開放政策の実験都市として1979年に誕生した深圳市では、1989年9月に中国初のテーマパーク、錦繡中華微縮景区（英名Splendid China、以下錦繡中華と略す）が造られ、それから2年後の1991年に中国民俗文化村がその姉妹園として開園した。2つのテーマパーク<sup>1</sup>は、その後の中国で起きたテーマパーク・ブームとエスニック・ツーリズムの原点（曾 1998、橋爪 1999、Oakes 2006、高山 2006）とされており、中国国内ではアミューズメントパークの成功例として高く評価されているだけでなく、「愛国教育基地」という政府からの名誉も与えられている。錦繡中華では遺跡建築や歴史モニュメント、伝統民族家屋、自然風景など、82点のミニチュア展示物を時空間的に秩序化することで、「五千年の歴史を誇る美しい中華」という国家像を表象し、今日の中国の国土領域を縮小された地図の如く可視化している。中国民俗文化村では「少数民族文化」を中心に中国の民俗文化を動的に展示することで、錦繡中華が表象する歴史的地理的「国家像」に「中国が多民族国家である」という要素を付け加え、また実物と同じ大きさの民族家屋や少数民族の若者の身体およびそのパフォーマンスを通して生きた国民像を造り出してもいる。深圳でテーマパークを造るに至った背景として挙げられるのが、華僑資本の誘

---

キーワード：国家、表象、深圳経済特区、中国民俗文化村、少数民族

\*平成20年度生 ジェンダー学際研究専攻

致と観光事業の促進といった中央政府の経済政策である。改革開放政策が公表された当時、観光業で外貨を稼ぐべきだと鄧小平が提唱したこと、1985年から始まった第七次五ヵ年計画において観光地や交通網などの基礎開発設備が本格的に行われるようになったこと、また1985年8月に中央政府華僑事務局の委託の下で香港の旅行会社によって華僑城開発区の開発プロジェクトが発足されたことなど、ナショナルスケールの経済的事象がその背後にある。ここで指摘したいのは、こうして経済的なニーズに応じて造り上げられたテーマパークが、同時にグローバル社会に接続する際に、国内外に向かって中国側がナショナルな自画像を表象する場ともなるということである。

「民族」という概念は18世紀西欧の近代的「国民国家」が形成される中で出現したもので、中国では19世紀後期に清末の政治家、梁啓超によって英語のnationという語の訳語として「国民」や「国民国家」などの諸概念とともに中国に導入された。当時、西欧帝国の植民地主義に対抗して孫文が「五族共和」<sup>2</sup>という「民族主義」を唱えた。現在の中国は漢民族と55の少数民族によって構成される多民族国家として知られているが、「少数民族」(minority nationality)<sup>3</sup>という概念もまた、1949年中華人民共和国の成立後に「漢民族に比べて数が少ない民族」をさすものとして用いられるようになったのである。中国では少数民族に対して、国家の領域空間への統合とともに、漢字を中心とした漢族が主導する民族文化への統合が絶えなく行われている。

1949年に成立した中華人民共和国政府は①民族自治地域<sup>4</sup>の設置、②民族識別工作、③少数民族の民主改革といった三つの柱からなる新たな民族政策を実施し、均質で一定の領域を少数民族自治地域と規定し、55の「少数民族」の登録と認定を実現した。松村(2000)によれば、多民族国家・中国にとって、民族自治地域の設置と民族識別工作はそれぞれ「多民族を内包する国家の構想」と「少数民族を『中華民族の一員』として統合する」国民形成のプロセスであって、国土空間の再編成と密接に絡んでいるという。中国共産党政権は中国全土の六割を占める少数民族自治地域を中国の版図に収めると同時に、「少数民族」との対比を通じて、「元来は中華帝国の行政網に形式的に組み入れられた雑多な人々の集合体に過ぎ」(曾他編 1995: 52)ない漢族に、一つの「民族」としての輪郭を与えもした。また、少数民族の集住地が主に国境付近にあるため、「民族」は中国にとって国家の領域に関わる問題としても見ることができる。したがって、「民族」とりわけ「少数民族」は、中国という国家を定義する際の鍵となる要素であるだけでなく、国家を想像可能なものとするために利用される重要な媒体の一つでもある。「少数民族」を認定することによって、多数派である漢族がより明確な輪郭を与えられるのと同時に、周縁化され表象された少数民族の文化表象に多数派国民のまなざしを向けることによって、「多民族国家」としての中国像はより鮮明な対象として構築されることになるのである。本稿は、錦繡中華とその姉妹園である深圳中国民俗文化村を対象に、もともと多様な地域・集団をナショナル空間に統合するために道具として構築され表象された「民族」と「民族文化」の表象が、商品化のプロセスの中でいかなる変化を見せているのかを明らかにすることを目的とする。

## 1.2 研究の方法と視点

博物館やテーマパークと国家との関係を文化政治的に検討した研究として、まず瀬川の論考が挙げられる。瀬川(1995)は、1975年ジャカルタ南郊で開園した「美しいインドネシア・ミニ公園」がスハルト政権(1968-1998)による国民国家を見せるショーケースであると論じている。能登路(1990)は、ディズニーランドは「強く正しく美しいアメリカ」と「驚異と冒険に満ちた世界」という国家像が表象されていて、ディズニーランドが「国賓を迎える舞台」や「外交政策の手段」という政治的役割を果たしていると言及している。中国のエスニック・ツーリズム、とりわけテーマパークについては、橋爪(1999)が、河北省呉橋の「雑技大世界」を事例にテーマパークが「失われた地域文化」の再生や保存、または「新しい地域文化の創造」を促すと論じている。曾(1998)は、エスニック・テーマパークが「民族文化」の創出や民族知識の普及教育などの文化的機能をもつと論じている。また、韓(1996)は文化観光が伝統的庶民文化や革命文化、また中華アイデンティティとナショナリズムを再構築するための文化装置であると述べている。高山(2006)は中国のエスニック・テーマパークでは漢民族の伝統的な価値観に基づいた序列化、少数民族のセクシュアリティや「原始」と「野蛮」の強調、ならびに「内部的多様性が是認される」中華民族の一体性というイデオロギーが表象されていると論じている。

少数民族地域を分析対象にしている研究に比べ、中国国内の研究者は都市のテーマパークにも注目している

(保継剛 1997, 2000)。しかしながら、これらの研究は経済的収益や経営方式などといった視座の分析に偏っており、テーマパークが造られる空間的・社会的・歴史的な背景に十分には言及されていない。本研究では、深圳中国民俗文化村が置かれた重層的なスケール（ローカル、ナショナル、グローバル）に関連づけながら、民族表象とその意味を歴史的空間的文脈において検討したい。

以下では、まず第2章で改革開放以降のグローバル化する中国における深圳の都市社会の位置づけを確認し、深圳中国民俗文化村の母胎である華僑城開発区について概観する。第3章では深圳中国民俗文化村とその姉妹園である錦繡中華について概観し、深圳中国民俗文化村において何が「民族文化」として選別されて展示され、そしてどう表象されているのかを検討する。本稿で使用する資料の一部は2007年3月と2009年9月に、現地で行ったフィールドワークに基づくものである。

## 2. 研究対象地の概要：深圳と華僑城

### 2.1 実験地と窓口としての深圳

中国広東省南部に位置する深圳（図1）は、香港に隣接するという地理的経済的に有利な条件のもと、1979年1月に改革開放の実験地として誕生し<sup>5</sup>、8月に深圳市内で327.5km<sup>2</sup>の面積の土地が「経済特区」に指定された。以来中国では、全国的に新たな政策に基づく改革を行なう前に、「経済特区」で改革案を試験的に実施し、その成果を測り、そこで得た経験を本格的な制度設計に生かすという方策をとっている<sup>6</sup>。1985年の党建工作会議で鄧小平は、改革開放政策は中国にとってだけでなく、世界にとっても一つの大実験であると述べている。また改革開放政策においては経済特区が一つの実験であり、深圳はその実験地である<sup>7</sup>。深圳は抽象化された経済的存在ではない。それはまた、実験された経済政策の有効性や「四つの現代化」や「中国の特色をもった社会主義」など、改革開放期における鄧小平のイデオロギーを見せるための具体的空間でもある。



図1 深圳市及び華僑城の位置図  
(2012年筆者作成)

鄧小平は深圳をグローバル化の窓口にも喩えている<sup>8</sup>。深圳は中国が世界の軌道に接続する際に実験的な見せ場として作り上げられた以上、必然的に中国とグローバル社会との相互交流を媒介する役割をもつことになる。そこには、深圳を中国の内と外とを連結させる相互交流の開口部にするという政府側の意図が読み取れる。つま

り、深圳は中国の国民に外の「世界」を見せ、また同時に世界の人びとに「中国」を見せるために創り上げられたいわば見せ物的な空間なのである。「5000年の中国を見るなら西安へ、500年の中国なら北京へ、100年の中国なら上海へ、今の中国なら深圳へ」及び「深圳の現在は中国の未来である」といった中国で流行りのキャッチフレーズは、深圳の「見せ物」としての場所の特性を物語っている。

## 2.2 華僑城の概観

深圳の発展も、改革開放期における外国資本の導入も、香港を中心としたトランスナショナルな華僑社会と密接な関連をもっている<sup>9</sup>。1985年8月に国务院華僑事務局の委託を受け、香港中旅集団<sup>10</sup>が深圳経済特別区の南海岸（現在の南山区）にある総面積4.8km<sup>2</sup>（2009年現在6 km<sup>2</sup>に拡大された）の土地を、深圳特区華僑城（以下華僑城と略す）（図1）として開発することになった。1986年5月に華僑城集団有限公司が国営企業として設立された後、香港中旅集団との合資で華僑城開発を開始した。華僑城は、在外華僑、華人や外国の資金、技術、人材を導入するための窓口として構想されていた<sup>11</sup>。当時華僑城開発の最高責任者に任命された馬志民<sup>12</sup>は、開発案を練るためにヨーロッパで調査を行い、オランダのハーグ市で訪れたミニチュア遊園地のマドローダム<sup>13</sup>に惹かれ、中国の歴史文化というテーマをもつミニチュア遊園地の建設を、深圳華僑城企画の第一歩とすることに決めたという。1987年に中国政府による1億元の総投資によって、錦繡中華の建設が開始され、1989年9月に開業した。馬志民は後に開発された中国民俗文化村と世界之窗<sup>14</sup>の企画責任者でもあり、中国テーマパークの父と称されている。これらのテーマパークは実際に、両社の中枢事業であるだけでなく、深圳という都市のシンボルにもなっている。

## 3. 国家の表象から民族の表象へ

### 3.1 錦繡中華：国家の表象

錦繡中華（図2）は1989年9月に開園した。総面積は30万平方メートル、中に82点の中国各地の名所旧跡、風景名勝、家屋建築が1/15の縮尺で再現され、約5万の縮小した人間と動物の模型が建造物とともに展示されている。「錦繡」という言葉は「美しい」、「輝かしい」を意味する。錦繡中華は、その名前の通り、一つの「美しい中華」

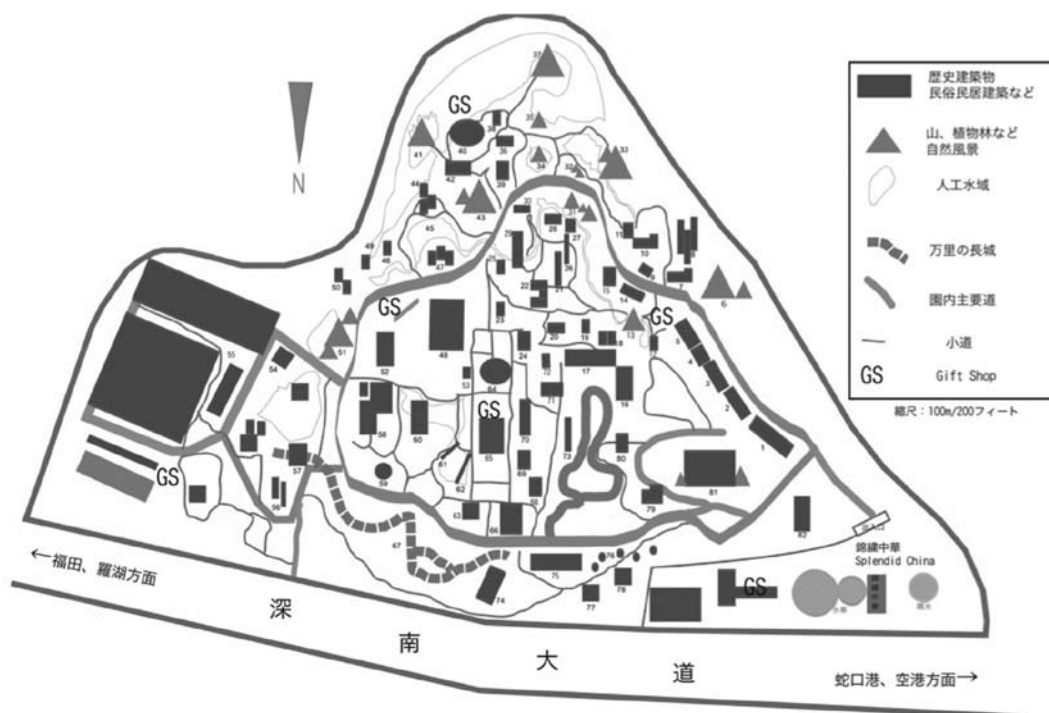


図2 錦繡中華の景観配置図

（錦繡中華・民俗文化村のガイドブックに基づいて筆者作成）

という国家像を構築している。展示物の空間的配置はモデルとなる本来の遺跡建築や山水民居の地理的配置にほぼ一致しており、まるで一枚の中国地図のように観光客の目の前に展開されていく。

北西にある入り口から足を踏み入ると、まずチベットのポタラ宮殿（図2の81、以下番号のみ表示する）、山西の九龍壁（1）、雲岡石窟（4）、懸空寺（20）、甘肅敦煌の莫高窟（2）など、北西地域を代表する展示物が見えてくる。ミニチュア化された万里の長城は錦繡中華の北側に東西方向に伸びており、その北外側に新疆の大清真寺（78）、香妃墓（77）、内モンゴルのチンギス＝ハン陵（75）や昭君陵（74）が配置されている。長城のすぐ内側には、河北にある旧清朝皇帝の避暑山荘（58）、北京の頤和園（60）、天壇（64）、故宮（65）があり、旧都北京の歴史を再現している。中央部から南方向に向かって、それぞれ河南、四川、雲南、広西、広東を代表する河南の塔林（27）、少林寺（28）、成都の武侯祠（15）、聖寿寺（16）、雲南の曼飛龍塔（9）、大理三塔（8）、広東の仏山祖廟（36）が並べられている。園内の東南側には南北方向に流れる水域が設けられ、水辺に沿って江蘇、浙江、安徽、福建、海南を代表する建造物が順序よく配置されている。有名な海浜リゾート地として知られている海南の天涯海角（37）は錦繡中華の最南端の水域に浮び、その東に台湾の代表的な景観として、ミニチュア化された阿里山（41）が静かに姿をみせている。

こうして、錦繡中華においては歴史の表象<sup>15</sup>に空間的秩序が組み込まれることで、現在の中国の国土領域を可視化して観光客に中華人民共和国という国家を想像させることができるようになっていく。言うまでもなく、チベットのポタラ宮殿（81）、新疆の大清真寺（78）と香妃墓（77）、内モンゴルのチンギス＝ハン陵（75）と昭君陵（74）といった少数民族地域の表象は、多民族が共存する領域空間を可視化する上で必要不可欠である。他方、白族、傣族などの少数民族の伝統家屋が展示されているものの、それらはミニチュア展示であるため、観光客の注意を引くことができない。その役割、すなわち多民族国家としての中国という国家の表象は、姉妹園である中国民俗文化村に委ねられることになった。

### 3.2 深圳中国民俗文化村：「民族」と「国民」を表象する

1991年10月1日に深圳中国民俗文化村（以下民俗村と略す）は、錦繡中華の姉妹園としてそれに隣接する20万平方メートル面積の敷地に開園した。民俗村のキャッチフレーズは「二十四個村寨、五十六族風情」（村寨は民俗村の少数民族の展示空間を意味する）とあるが、実際に展示されているのは国内で公認された55のすべての民族の文化ではなく、代表的な22の民族（漢族を含む）の24カ所の伝統家屋と宗教建築である。空間的に秩序化されたミニチュア展示の錦繡中華と異なり、民俗村ではランダムに配置された民族家屋建築を背景に、観光客にリアリティーを連想させる動的な展示が行われている。実物大の家屋建築をベースに少数民族の生活習慣や民俗文化が展示されているほか、観光客参加型のショーや期間限定の祭りイベントが行われている。丁寧な造られた伝統家屋の中では、日常生活用品や生産用具などが展示されている。厨房には焦げ付きのある鍋、倉庫には泥まみれの鋤、寝室には古びた家具や布団、壁には母親から受け継がれた花嫁衣裳など、すべての展示品は実際に使用された痕跡を伺わせるものばかりで、民族文化への真正性の追求を際立てている。実際、民俗村は国務院から「民族博物館」という名誉を与えられている。

少数民族の集住地域から雇い集められた青年男女は、自らの身体を通じて文化を表象する主体でありながらも表象されるリアルな文化記号となって、民俗村の真正性の表象に貢献している。契約社員として雇われている少数民族の若者たちの役割は、制服でもある民族衣裳を身にまとい、各民族の展示施設の中で伝統的遊戯をしたり、民族楽器を演奏したり、伝統民族刺繍に営んだり、仲間とおしゃべりをしたりして、まるで自分たちが現実にそこで暮らしているかのように観光客に見せることである。また、通りかかる観光客にさりげなく挨拶することや、展示を覗きに入ってくる観光客に自民族文化を簡単に解説したり、必要に応じて観光客と一緒に写真を撮ったりすることも重要な仕事である。少数民族の若者たちはパフォーマーとして村寨の中でのショー以外にも、毎晩行われる大型イベントショーや季節限定の祭りにも出演している。民俗村には漢族の伝統住居建築、北京四合院と陝北窑洞の展示もある。しかし、民族衣裳姿の漢族パフォーマーなどはけっして見られない。ここでは少数民族文化に対するステレオタイプ化された異国性や原始性が強調された展示表象（高山 2006）を通じて、（華僑や海外在住する華人を含む）漢族はもっぱら観光客（まなざす主体）として、自分たちが漢族で多民族国家の国民だという事実を再確認する仕組みになっている。

少数民族村寨の展示内容は、基本的に主流の漢民族文化にステレオタイプ化された「伝統文化」に基づいて編集されている。青年男女の恋愛結婚をテーマとする内容で、少数民族の若者たちの身体を通してセクシュアリティを見せ物にするものが多くみられる（表1）。その一例として、佤族<sup>16</sup>の場合をみてみよう。入り口には人間と同じ大きさで性器が強調された男女の彫刻が置かれており、中にある舞台には民族文化の象徴記号とされる祭祀用楽器の木鼓と水牛頭骨が飾られている。佤族のショーでは、黒馬王子と黒馬公主と呼ばれる肌色の黒い佤族青年男女が大げさな動きで走り回り、黒い長髪を揺らして踊る。途中で観衆の中から長髪の若い女性が選ばれ、主役の黒馬王子の恋愛相手役としてショーに参加させられる。佤族の女性たちが彼女に髪を振る踊りを教え、そして一緒に踊る。そこで木棒を持った二人の佤族青年男性が格闘をしながら登場する。やがて一人の勝者が決まってくると、黒馬王子となって参加してきた観光客の女性に向かって情熱的な踊りを見せ、求愛する。最後に縁を結ぶ贈り物（手作りの首飾りや香袋など<sup>17</sup>）を彼女に渡し、ショーを終える。こうした佤族の表象は、男性が好戦的で、女性は長髪で巻きスカートを着用し、銀製の髪飾りや大きなピアスをつけるという定型イメージに基づいている。一方、他の展示館では女性性を対象にした表象が支配的であるのに対し、佤族のショーでは男性性を中心にスペクタクル化されていることも特徴である。

表1 中国民俗文化村・少数民族ショーの上演詳細表

村 寨	回数/日	人数	テーマと内容
彝 寨	2	9～11	阿詩瑪の故郷：彝阿詩瑪の結婚式、彝族の伝統舞踊と音楽
苗 寨	2	8～12	蘆笙場の恋歌：若い男女の求愛場面、笙の演奏と伝統舞踊
黎 寨	2	6～10	竹竿舞とこま飛ばし：竹竿を使った踊りとこま飛ばしの競争
維吾爾住居	3	8～14	天山の男女：伝統音楽と舞踊；ベリーダンスも取り入
藏 寨	3	10～20	神秘的な西藏：宗教儀式、伝統音楽と舞踊
侗 寨	3	6～10	侗族青年が裸足で刀梯を登る場面と求愛テーマの伝統歌謡
佤 寨	3	8～12	不思議な佤族山寨：伝統木鼓音楽と佤族娘の髪を振る踊り
傣 寨	2	8～12	シーサンパンナの熱帯風情：民族音楽と舞踊
摩梭人木房	2	8～14	女兒国の物語：母系社会である纳西族摩梭人の恋愛と結婚

(2009年12月のフィールドワークより筆者作成)

もうひとつ例を挙げてみよう。彝寨のショーでは、古くから伝わってきた彝族撒尼人伝説の主人公の阿詩瑪の結婚式が繰り広げられている。パフォーマンスはユーモアに戯れ合う若い男女の日常生活の場面から始まり、10人前後のパフォーマーたちが農業道具を楽器代わりに使い、陽気なメロディを披露している間に、主人公の阿詩瑪が恋人の阿黒と恋しく戯れ合いながら登場してくる。そこで、観客席から一人の男性観光客がパフォーマーたちの呼びかけでショーに参加する。男性観光客は阿黒のかわりに阿詩瑪の結婚相手となって結婚式のショーを終える。その後、パフォーマーたちには、観光客と一緒に写真を撮る仕事が残っている。他のパフォーマーに比べ、阿詩瑪と一緒に撮影したがる観光客が圧倒的に多い。阿詩瑪は、路南彝族の一つの分支である撒尼人の民間伝説の主人公の女性で、美と貞操の象徴とされている。阿詩瑪に関する語りはかつて20数種ほど存在していたが、現在広く伝わっているのは1954年に中央政府の文学者が改編したものである。改編された語りにおいて、女性美と貞操を象徴するシンボルに加えて、阿詩瑪はさらに封建制支配勢力に立ち向かう不屈な反抗者として構築されている。伝説の中の阿詩瑪は恋人を救うために、洪水に流されて石像になるという悲劇的結末を迎えるのだ。それとは異なり、民俗村の彝寨の阿詩瑪は恋人と結婚式を挙げて幸せに暮らす。ここでは「本物」の民族伝統が観客の娯楽消費のニーズに応えるように再構築されていることが分かる。しかし、いずれにせよ、こうした少数民族の文化表象はそれにまなざしを向ける多数派国民の観光客に「多民族国家」の一員であることをより鮮明なイメージを提供しているのである。

#### 4. むすびにかえて

1985年以降に発展してきた観光事業に促されて、少数民族文化は政治的なプロパガンダに加え、さらに経済的な意図のもとでもスペクタクル化され商品化されるようになった。女性美と貞操を象徴するシンボルである彝族撒尼人の阿詩瑪は、1950、60年代においては「封建支配勢力に立ち向かう不屈な反抗者として構築され」民族団結の宣伝や封建制度への批判などの政治的なプロパガンダに利用され、悲劇的に描かれていたのに対して、1980年代以降、民俗村のような観光施設では綺麗で明るい娘という明朗なイメージに取り替えられた。これらは、深圳という改革開放の実験都市において、海外の華僑や華人を意識したグローバル社会に向けて「民族」、とりわけ「少数民族」（佤族青年男女の黒い肌や彝族撒尼人・阿詩瑪の身振り）を可視化することで中国という多民族国家を表象しようという実践といえる。佤族青年の求愛と贈り物を受ける（おそらく漢族であろう）観客の女性、また阿詩瑪と写真を撮りたがる観客の男性はみな、民俗村で「自分」と異なる「他者」を消費することで自らがこの多民族国家の一員であることを感じ取るのである。

民俗村の文化表象は現に中国政府が直面する民族間紛争や対立に対して、特別の政治的配慮を示している。周知のごとく、維吾ル族が集住する新疆と藏族のチベットでは未解決な民族問題が多く存在し、漢民族との間に暴力衝突も頻発している。民俗村ではこれら二つの民族への特別な政治的配慮が見られる。民俗村の敷地内には、藏族のラマ教寺院や維吾ル族のムスリム建築などの宗教展示物が広い面積を占めており、鄧小平や江沢民など中国の政府要人が民俗村を訪問した際に、藏族と維吾ル族の演者たちと一緒に撮影した写真が数多く展示されている。また、これらの村寨で働く少数民族従業員に対しては、他の村寨より徹底した厳しい監視管理が実施されていることがうかがえる<sup>18</sup>。表面上では宗教文化と民族文化が展示テーマとなっているものの、実際に表象されているのは少数民族の宗教文化を容認し、少数民族との間に「友好関係」を維持しているという少数民族に対する中央政府の政治的姿勢である。

無論、民俗村で観光客が実際に経験するのは本物の民族文化そのものではない。それらは再構築されたものにほかならない。また、標準語と簡体字の普及教育など様々な手法を通じて少数民族のエスニシティそのものを統制的に構築してきた。革命後の中国では、チベット仏教やイスラム教などを含む各種宗教および少数民族の伝統信仰や風俗慣習は、「封建迷信」として事実上禁止されてもいた。しかし、市場経済体制を取り入れた現在の中国社会では、国家の表象や観光事業の促進など様々な目的で、少数民族の宗教や文化がスペクタクル（見せ物）化され商品化されている。それは同時に少数民族のエスニシティの再構築でもある。中国のエスニック・ツーリズムを先導する深圳の民俗村において、「少数民族文化」のスペクタクル化と観光商品化を通じて「民族」および「民族文化」の構築／再構築が行われているのである。

民俗村のスペクタクル化の実践は少数民族の若者たちの身体をもってはじめて可能となる。彼／彼女らの身体は表象の媒体であり、文化記号としてスペクタクル化される客体でもある。しかし少数民族の若者はまた同時に、「民族」と「民族文化」を表象する主体でもあり、そこには多数派によって割り当てられた「民族文化」の表象の枠内に収まりきれない意識や生活実践も存在する。たとえば、佤族展示館のリーダーでもある雲南滄源佤族自治州出身のAさんは、1998年にパフォーマーとして深圳中国民俗文化村に雇われて以来、佤族展示館のパフォーマンスの編集に参加しただけでなく、河南省出身の漢族男性と結婚し、深圳の都市戸籍を取得するなど、民俗村での仕事を通じて深圳という都市を生きている。こうした生きられた空間の詳細な検討については次稿を期したい。

#### 【参考文献】

- 韓敏（1996）「中国観光のフロンティア—創出される〈地域文化〉」『観光人類学』山下晋司編 新曜社pp.169~177
- 呉奕新（2006）「華僑城集団文化旅遊産業発展研究」『2006年深圳文化藍皮書 城市文化産業与發展模式創新』
- 鈴木正崇（1985）『中国南部少数民族誌—海南島・雲南・貴州—』三和書房
- 瀬川真平（1995）「国民国家を見せる—うつくしいインドネシア・ミニ公園における—凶案・立地・読みの専有」人文地理第47巻第3号、pp.1~19



## 李 深圳中国民俗文化村における「少数民族」の表象

- 曾士才 (1998) 「中国のエスニック・ツーリズム—少数民族の若者たちと民族文化—」『中国21』Vol. 3, 風媒社, pp. 43-68
- 曾士才、西澤治彦、瀬川昌久編 (1995) 『暮らしがわかる アジア読本 中国』河出書房新社
- 高山陽子 (2006) 「娯楽におけるエスニックの表象—中国のテーマパークの事例を中心に—」『中国21』Vol. 24, 風媒社 pp. 267-288
- 松村嘉久 (1993) 「中国における少数民族政策の展開」人文地理45-5, pp51~73
- 松村嘉久 (1997) 「中国における5自治区の領域画定の過程—「大分散, 小聚居」的民族分布の検証」『中国研究月報』596号, pp.1~22
- 松村嘉久 (2000) 「祖国中国をいかに見せるのか—観光、スペクタクル、中華民族主義—」『中国研究月報』第623号, pp.1-26
- 橋爪紳也 (1999) 「中国における文化観光開発とテーマパーク事業」『人文研究』大阪市立大学文学部紀要第51巻第9分冊 pp. 77-100
- 能登路雅子 (1990) 『ディズニーランドという聖地』岩波書店
- 費孝通著、塚田誠之訳 (1997) 「エスニシティの探求—中国の民族に関する私の研究と見解—」『国立民族学博物館研究報告』22巻2号, pp.461~479
- 費孝通 編著、西澤治彦、塚田誠之、曾士才、菊池秀明、吉開将人共訳 (2008) 『中華民族の多元一体構造』風響社
- 山崎孝史 (2005) 「グローバルあるいはローカルなスケールと政治」『シリーズ人文地理学4 空間の政治地理』水内俊雄編 朝倉書店 pp.24-44
- 楊耀林・梁政 (2005) 「深圳文博事業現状と発展研究」『2005年深圳文化藍皮書—城市文化戰略与高品位文化城市』中国社会科学出版社, pp.328~339
- Anagnost, A., *National Past-times: Narrative, Representation, and Power in Modern China*, Duke University Press, 1997.
- Oakes, T. & Schein, L., *Translocal China: Linkages, Identities and the Reimagining of Space*, Routledge, 2006.
- 保継剛 (1997) 「主題公園发展的影响因素系統分析」『地理学報』4 Vol. 52, No.3 pp.237~245
- 保継剛 (2000) 「珠江三角洲主題公園發展回顧」桂林旅游高等专科学校学报 Vol. 11, No. 2 pp.15~19

## 【注】

- 1 2つのテーマパークは2003年に合併して深圳錦繡中華・中国民俗文化村に統合された。
- 2 「五族共和」の「五族」は漢族、満州族、蒙古族、回族、藏族という五民族をさす。
- 3 中国では公式に「民族」の英語訳語をnationalityとし、「漢族」をHan nationality、「少数民族」をminority nationalityとしているが、外国の学術論文では中国の少数民族に対して“ethnic group”、“ethnicity”を用いることが多い。
- 4 1984年制定された「民族区域自治法」は民族自治地方（5の自治区、50の自治州と120の自治県）には、自治権として立法権、民族の言語・文字を使用する権利、人事管理権、経済管理権、財政管理権、教育管理権、文化管理権、公安部隊組織権、天然資源の管理・保護・開発権、民族の風俗習慣を保持又は改革する自由、宗教信仰の自由を規定している。
- 5 改革開放政策が公表されて一ヶ月後の1979年1月23日に、中央政府と広東省委員会の決定によって広東省宝安県が深圳市に改組された。1月31日に深圳市蛇口に工業区を設立し、香港招商局に建設権限を与えることを決め、2月に「輸出商品生産基地」の建設と国家予算からの1.5億円の投資が決定された。1980年5月に「輸出商品生産基地」が「経済特区」に改称された。1981年に深圳は副省級市に、また1988年に広東省直轄市に昇格し、さらに1992年2月に地方法律法規の制定権を与えられた。深圳は急速な経済発展と都市化を遂げ、設立当初僅か3万人だった人口は2010年には1322万人に達し、一人当たりの地域GDPも長年にわたって全国最上位を占めている。
- 6 深圳は経済改革に対応した労働賃金管理制度や戸籍制度改革、土地制度改革から年金制度や社会保障制度など様々な法律法規、経済社会体制改革の実験地となった。
- 7 『鄧小平文選 第三巻』1985
- 8 鄧小平は1984年1月に深圳に訪れた際、「経済特区は窓口である。それは技術の窓口であり、管理の窓口であり、知識の窓口であり、対外政策の窓口である」と講話した。
- 9 当初中国返還後の香港との相互経済協力などの役割を果たすことが構想されていた深圳は、香港企業を中心とした莫大な外国資本による軽工業や製造業の基地として発展した。経済発展が先に進んでいる東南沿岸経済地域における香港は、直接投資源と輸出相手のいずれでも一位を占めている。広東省から香港への輸出は全体の81%に達し、香港からの直接投資は広東省が受け入れた投資総額の81.8%を占める（1990年のデータによる）。
- 10 香港中旅集団の前身は、1928年4月に上海の銀行家陳光甫によって香港で設立された香港中国旅行社で、中華人民共和国の成立後、國務院の華僑事務局に接收され、国営企業となり、香港を拠点に営業活動をする傍らで中国の外交政策や外貿政策に関与協力していた。
- 11 当時の國務院華僑事務局主任の廖暉は「華僑城開發区」について祖国の〈上下五千年、縦横九百六〉の歴史文化と大好河山を海外にいる華僑・華人に見せて呼び寄せ、団結させる紐帯とすべきであると述べている。
- 12 馬志民 (1932-2006) は1979年に國務院華僑事務局によって香港中国旅行社に派遣されるまで、人民解放軍や宝安県政協委員会、広東省外務事務局や広東省華僑事務局など政府機関で責任者として勤務していた。香港中国旅行社に入ってから、順調に経営責任者助理、副担当とキャリアを積み、そして1985年香港中旅集団が設立されるときに、副理事兼総経営責任者として華僑城開發の指揮者に任命さ

れた。

- 13 マドローダムは、マドロー一家が第2次世界大戦で愛する祖国オランダのために戦死した一人息子ゲオルグを記念するために、1952年に出資して建設したミニチュアの遊園地で、6 km<sup>2</sup>の敷地内に百数種類の建物や乗り物、植物、人間とその生活にいたるまでオランダでみられる殆どすべてのものが正確に25分の1の縮尺で再現されている（ブリタニカ国際大百科事典 2006年版より）。
- 14 1994年に華僑城開発区内に開業したテーマパークで世界の歴史と文化をテーマにしている。
- 15 錦繡中華における歴史の表象については別稿で論じることとする。
- 16 佤族は、中国雲南省南西部の国境地帯のアワ山に集住している民族で、2000年の国勢調査によれば人口が39万7千人ほど、55の少数民族のうち人口順位では25位を占めている。中国の民族の中では最も肌の色が黒い民族として知られているほか、首狩りの習俗があったことも広く知られている。
- 17 筆者はそれぞれ2007年3月と2009年9月に二回ワ族のショーに参加し、二回とも赤い「荷包（ハーポー）」という小さい袋をもらった。荷包（ハーポー）は古くから中国各地域で身の回り品として男女問わず使用されていた。
- 18 2009年に筆者が民俗文化村で働く苗族と瑤族の演者から聞きとったところによれば、チベット族とウイグル族のパフォーマーだけに対して休暇で実家にいる間は週に一度、現地の公安に出頭する義務が課されているという。